

## 短篇二ツ：創作

著者	河崎，正次郎
雑誌名	龍南
巻	2 2 1
ページ	1 3 - 2 2
発行年	1932-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7054">http://hdl.handle.net/2298/7054</a>

創作

# 短篇 二ツ

文二甲三 河崎 正次 郎

## I 曠 野

それはまだ彼女が男の肌を知らず初々しい處女の乳房を抱いてゐて誰でも彼女に會つた人は皆「まあ此の人は何んて可愛い人であらう」と微笑まずには居れない時であつた。彼女の頬は奔る様な血液で満たされ、解ぐれた黒髪が彼女の額に一寸垂れ下がつてどの男でも魅惑を感じない譯にはゆかなかつた。彼女は黄色くなつた木綿の手拭を姉さん被りにし、もうすっかり着古された堅縮の木綿を裾の所からからげて其の下に赤い蹴出をのぞかせて居た。彼女は貧い農夫の娘であつたのだ。然し其の黄色い手拭の下からは、眞黒なつぶらな目がのぞいてゐて、口紅を着けない可愛い唇が固く結すばれ、現はれて居る足も百姓女には見られない美しい曲線を示して居た。然しその足は、半ば擦り切れて了つて居る草履の爲、破れた足袋を透して大地の冷さを感じてゐた。彼女は背に刈り取つた乾れた茅を牛の様に積んでゐた。そして河に沿つた田舎道を歩いてゐるのであつた。然し獨りぢや無かつた。彼女の側には色の黒い、泥や肥料の爲粉々と臭を放つてゐる汚い野良着を着た若い青年が、心配さうに、ぢれつたささうに、そして戀しさうに彼女の横顔をコツソリ眺めながら歩いてゐた。然し彼女は唇を結んだまゝ黙々と堤の上をスーツと走つて居る樺色の道を歩き續づけた。此の道の田地の側には黄櫨の並木が冬の寒さで赤く火照り美しい行列をなしてゐた。堤の下は泥濘で、其處には一杯乾れて黄色く硬め果てた薄がズツシリと生へてゐて、其の中を時々雀がサガ／＼と音を立ててゐた。

カルヴァアトンは感ぜず、僕は感ずる女だ。

丁度川口になつてゐる此の邊りは押し寄せて来る満潮の加減で水は殆んどどんよとした停滞を示してゐて川の真中はなめらかな表面張力をなし、其の浅い海の色彩を帯びた此の水面の上を、二三艘の漁船がギイ／＼と悠長な櫓の音を立てながら上流の村へと溯つて居た。河向ふの岸は築堤工事の爲、絶へず十臺位のトロツコが危ふげな足どりで堤の軌道の上を走つてゐてその爲に發する何か生活に満ちた忙しさうな金屬の響が此の河を越えて渡つて来るのであつた。出來上つた部分の提防の石垣は此のどんよとした鉛色の壓迫の下で鮮明な色合を見せてゐた。

「ねえ——、芳ちゃん、よう考へてくんねー、悪い事は言やしねえよ——、あんたには俺の眞心が分らねえのか——」と其の百姓男は歩み續づけながら彼女のつぶやうな目を窺ひながら訊いた、そして其の日には眞剣な、哀な涙の潤ひさへ見えて居た。然し芳ちゃんと呼ばれた其の女性には微かな表情の變化さへ見せず、唯まつすぐズツと向ふの海に流れ出てゐる河口の堤防を越えて黝んだ海の、又其のズツト向ふを見凝めながら歩み續つけて居た。そして彼女が足をかはす毎に背中に背負つて居る茅がお互に擦れ合つてガサ／＼と音を立て居た。

「ねえ芳ちゃん——、あんたおいらの嫁さんになる積りぢやねえのか？、はつきり言つておくんな——」と男は如何にも悲しうな聲を立て、又彼女に訊いた。實際男の心は寂しかつた。今度二十七になる此の男は自分の青春を持て餘ましてゐた。彼女の美しい姿を見るにつけ、彼の彼女に對する愛執の炎は日に日に燃へて行つた。そして鄙に稀な此の女の爲なら自分の總てを捧げ盡くして了つてもいいと考へてゐた。だが相手の芳ちゃんと言ふ女性はなか／＼返事を與へなかつた。冷い冬の微風が黄燼の葉を通して彼等の頬を撫でて過ぎ去つた。彼女の姉さん被りの手拭ひがチヨットゆらりと揺れてゐた。——

「外に男でもあるんと言ふんかい、芳坊や——よう考へて見ないよー、親不孝すれば天罰が下るに間違ひねーやー、おめえの父さんも母さんも承諾なさつたんだから芳坊さへ一言うんとさへ言は、おいらは叔父の家を借りて婚禮するでねえだか、ねえー芳坊や、それから夫婦で汽車に乗つて俺が辛苦してためた貯金で温泉町で何處でも行かんべー。おめえの好きな活動も芝居もそれから銘仙の一反も買つてやるんべー、それから二人で村に歸つて毎日／＼仲善う働いて早やう父さん母さんに孫の顔を見せ

てやらんべー、なー芳坊や、悪い事は言はんねよ、よう考へて置きなよ、」

然し彼女は猶黙つてゐた。男の存在さへ認めない位黙々と歩み續けた。そして其の目は依然として此の道の突き出た堤防の向ふの海の、其の亦ズーッと向ふを見凝めてゐた。——男には寂しい沙黙が続いた。ただ二人の歩く登音のみが此の閑靜な田舎の空氣を軟く掻き亂してゐた。——そして二人は遂に分れ路迄やつて來た。

「ぢやー、おいらはチョイと役場迄行かんべねえから、おめえは先に歸んなー、それからねーお芳坊よく考へておくんだぜー」と男は言つた、そして其の田圃の方へ傾斜した畦道を下つて行つた。——芳江は矢張り黙つて男の後姿を見遣つた。アクドイ汚いソフトの下は眞黒な、ボソ／＼と毛の生へた男の頸が覗いてゐた。黄櫨の赤い葉が微かに搖れて居た。男は振返つた。そして立ちどまつて自分の方を見てゐる女の姿を認めると如何にも嬉しさうに満足氣に微笑して元氣よく急いで去つた。——

暫時してから彼女は又歩み始めた。背中の茅がガサ／＼と鳴つた。濕つた草腹がペタリ／＼と足裏にひつついた。そして河の眞中を發動機船が「タンタンタン タンタンタン」と規則正しい溜息を吐きながら平靜な水の面を掻き亂して居た。彼女は歩み續づけた。堤防の、幅二尺位の石の上に塗りつめられたセメントの眞白い直線がズーツと向ふ迄／＼延んでゐた。そして狭い此の道に元氣なさうな雜草が斑に其の弱い存在を示してゐた。——彼女は其の草を、樺色の凍切つた大地を、白いガサ／＼したセメントの堤防の上を前と同じ様な無表情で歩み續づけた。——然し彼女の瞳は矢張り黒かつた。彼女の頬は矢張り紅かつた。彼女は矢張り美しい女であつた。

堤防の海に突き出る四ツ角で彼女は背に負つた茅をおろして其のセメントの石垣の上に腰を下ろした。其處で彼女は靜に人生を、社會を、家を、結婚を、それから自分自身を考へて見た。——彼女の足許では内海の鼠色の潮が退屈さうにチャブ／＼と戯むれてゐた。彼女は美しい脚を宙に投げ出して、そして生氣の無い無氣味な冬の海を見凝めた。海のズーツと向ふには紫色の薄い山脈が鉛色の大氣にドンヨリ浮んでゐた。「ボーボー」と寂い汽笛を、沖を走る樺太通ひの貨物汽船が發してゐた。——かうして彼女は靜に人生を、社會を、家を、結婚を、そして自分自身を考へてゐた。——

——彼女の家は貧しかつた。陰氣な雨の染込んでジメ／＼した薬屋根を戴いた狭苦しい一つの家屋の中には彼女の小さい弟や妹が鼻を垂らして空腹のために黙つてゐた。赤子は乳を求めて火のつくやうに泣いてゐた。母はガン／＼怒鳴り散らして居た。父は薄暗い納屋の中で薬を打つてゐた。そして全く瘦せ衰へて目ばかりギョ／＼させ、絶へず借金の斷りや納税の延期をクヨ／＼心配してゐた。——彼女は是等の姿を想ひ出しては深い溜息をつかないわけには行かなかつた。——又處女會や青年團の持ち合ひでやつてゐる巡讀會の手垢のついた雜誌に出て来る田園詩人の歌ふ自然の美なんて、現在の彼女には見當らうとしても見當らなかつた。なるほど田に水車があつた。然しそれを空き腹で冷い風に吹かれながら踏まねばならぬと言ふ事は一通りの苦勞では無かつた。鳥も雀も鳴いた。然しそれは決して快い音楽に聞へはしなかつた。百姓等は皆收穫の蹂躪を恐れたのであつた。

——皆部落の人々は一日中をして一生懸命働いた。年取つた老人でさへも家で薬を叩いたり、夕方すつかり海が干いて了つて黒い潟や牡蠣の目殻で一杯になつた岩があらはれる時、老人等は其の冷い水の中をチャブチャブと、時には股迄も此の脂肪の無い乾枯びた肉體を浸しながら蛤や小つぽげな蝦を捕へたり、又よろ／＼と危ふげな足どりで牡蠣の生へた巖の中を百目五錢に賣れる章魚を捕へんが爲に矛を片手に出掛けるのであつた。若い働盛りの人々は言ふ迄も無い事であつた、此の半農半漁の部落は海に土地に眞黒く成る迄働き續づけた。然しそれでも絶へず小作米と家賃が彼等を追ひ掛け税金も滞納させ勝ちにした。

彼女は何故に農村でこんな悲慘な場所であらうかと思つた。其處には希望もなければ光も無かつた。彼女の求める輝かしい青春なんて見付けやうとしたつて見付からなかつた。陰鬱な軒下に色ばかり黒くて骨ばつた若者——彼女はもうそれで充分だつた彼女は自分の容貌を信じてゐた。そして殆んど結婚する許りになつてゐるさつき別かれた晋吉の事を思ひ浮かべて見た。肥臭い生臭い、其の體臭、黄色い齒、曲んだ鼻、醜い面皔——かう考へて來ると彼女は幻滅を感じない譯には行かなかつた。彼女は心の中で考へて見た。さつき晋吉は彼女と結婚すれば新婚旅行をする等言つたが、例へ其れが本眞であつたとしても、四五年経つて子供の二三人を生めばすつかり顔には皺が寄り、暗い軒下でヒイ／＼泣く子供を背負つて飯を炊いたり、裏の小川で子供のおしめを洗濯したりする様な生活が彼女を追ひ廻す事は明かな事であつた。

彼女は此の農村を逃れたかつたのだ。彼女は都會に對して深い憧憬を抱いてゐた。都會に行くならと彼女は考へるのだつた。——彼女の戀人は色の白い細つそりした、頭にはボマードでオールバックし、スマートな洋服を着、帽子を一寸横に被り紫のネクタイをしたモダンボーイでありたかつたのだ。そして若し自分がお金持の坊ちゃんに愛される様な事があつたら、十燭の電燈の家の代りに赤い屋根のベランダも庭園も應接室もそして夫との寢室をも別にした家に住み、今日は劇場明日は買物にと自家用の自動車で出掛け、一着何十圓とするコートを着、毛皮の首巻きに埋つもつてゐる自分の姿を想像しては跳び上りたい様な欣びを感じるのであつた。

沖を走る貨物船の汽笛が「ボー」と響いて來た。彼女は獨り描いた空想に稍々充血した目を上げて海を見た。すると鉛色の波の無い冬の海に向ふには紫色の遠い山脈がズーツと連つてゐた、彼女は微笑んだ、そして彼女はあの山に向ふにはきつと春が、暖い都會が自分を待ち焦がれて居るに違ひ無いと思つた。

そして都會へ——東京へ——

夜はシン／＼と更けて行つた。

彼女は白粉で冷く強張つた顔を一寸動かした。そして兩足をグーント延ばし太股を兩手で掻き毟つた。それから白いブツ／＼の湧き出て膨れ上つた紫赤色の唇を醜く開いて「アーアー」と退儀さうに欠をした。ジメ／＼と濡り切つた疊が黄色い光を受けて彼女の眼前に横はつて居た。——彼女は顔を上げて薄暗い天井を空虚な腫で見凝めてゐた。すると工場の汽笛が細く然も寂く「ボーツ」と東京の此の龜井戸の魔窟へも障子を透して響いて來た。彼女は故郷で聞いた貨物船の汽笛を想ひ出した。そして獨りで虚無的にニヤリと笑つてゐた。——

## Ⅱ 顔

カルヴァアトンは感ぜず、僕は感ずる女を。

——自分はあの女を輕蔑しやうと努めてゐた。何となればあの女は男の様に跳ね廻つたりする位のフラツパーで、そしてとてもコケティシユな女らしく見へたのだもの。そして俺の直感ではあの女はあの男に戀してゐるらしかつたから——俺がゾツとする程のプチ・ブルイデオロギツシユなあの男に。それで俺はあの女を輕蔑しやうと努めて來たのだ。然し會つて見るとあの女何と美しい女だらう。どうして輕蔑なんて出来るものか。——あの女は漸く成熟しかゝつた乳房の脹みを緑色の毛絲のセーターでそゝつと抑へ、長いストツキングを通してすんなりした、麗い曲線を描いて踵の高いエナメル靴で歩いて行くんだもの。そして美しい房々した漆黒の髪をやはらに吹いて來る春風に快けに解這せてゐるんだもの。それからあの純白の頸、可愛い耳朶、陰指す様な長い睫毛、櫻んぼの様な紅い頬——何て彼女はあんなに美しいんだらう。彼女を、彼女を戀せずには居られるもんか——と彼はそう思はずには居られなかつた。

彼は心の中であう思ひながら何となく樂天地にでも行つた様な氣になつて、口笛を吹き出した。そして足並み快くそのメロデ  
イーには合はせながら小鳥の様に歩いて行つた。「俺は確にあがつてゐるな」と彼は思つた。「俺も案外もういぞ！ 一時間前はあ  
んなに憂鬱症だつたのに！ あゝ人間て者は何と優しい者だらう」と彼は獨りで微笑んだ。町角で子供等が集つてワア／＼騒ぎ、緑  
がかつた木の梢では雀がチュウチク、チュウチク轉り、ズーツと向ふの、雪の融けかゝつた山に向ふから春がコツソリ忍び寄つ  
て來てゐた。

彼は家に着いた。そして口笛をやめて襖をガタンと開けて自分の部屋に入つた。部屋にも春の暖い陽が射込んで、彼の机を半  
分明るく、後の半分の蔭にしてゐて、そして明るい部分の空氣には幾多の分子が幾多の型をなして躍つてゐた。彼は「ブーツ」と  
吹いた。すると、ブーツ埃が立つた。彼は机に向つて坐つた。そして靜かに搖れる弱かな柳の枝を見て彼は幸福を感じた。何と  
人生と言ふものは嬉しいものだらうと思つた。これで甚い感傷にある時、死なうと思つて見ても死に切れない譯が分つたと思つた  
「こんな大きな魅力が此の世の中にあるんだもの」と彼は獨り合點が行つた様に頷いて、圓るめた美術展覽會のプログラムでボ  
ン／＼と机を叩いて「生きよう、生きよう、死んで堪まるものか」と思ふのであつた。あの女は何と美しい女だらうと彼は何度  
も繰返へさずには居られなかつた。もう彼の頭腦にはムツソリ、ニーも、ヘーデルも、シンクレアーも無かつた。イレテリゲンツアは  
何處に行く等言つて深い溜息をつきはしなかつた。彼は自分の心臓の奴が急速に廻轉し始め、血液の奴がダク／＼と元氣よく流  
行し、新陳代謝が間斷なく行はれて自分の顔も、肩も、胸も、手も足も青春の情熱で火照つて來る様に感じた。彼の途上には理  
想が輝いてゐた。未來が、あの女が彼を招いてゐた。そして彼は「いざ行け、遙か希望の丘を越へて」と足らない中音で歌ふの  
だつた。――窓を洩れて來る風が冬の名残を含んでヒヤリと快く彼の頬を撫でてゐた。――

かくして彼は暫時快い法悦にあつた。が歌つてゐた彼の視線が何氣なく空間から積み重さねてある本に移つた。その時彼は本  
の上に置かれてある赤い平たい物体を知覺した。「鏡だな」と彼は思つた。何故だか突然彼はバタリと唄を止めて角ばつた其の  
鏡に手を觸れた。彼は其の時何だか自分の平和が第三人者に由つて掻き亂された様な不快さと、漠然たる不安とがこんがらかつ



てゐるのを感じた。其の鏡は縦が五寸横が三寸位で一年前の秋の夜に彼が夜店からコツソリ買つて來たものだつた。(確かそれは三十錢だつた。)其の鏡を手にした彼は何んだか言ひ知れぬ寂しさが冷い硬度の其の物体から彼の神經を通して緊々と迫つて來る様に感ずるのであつた。そして彼の手迄が硬ばつて微すかではあるがブル／＼と顫るへてゐた。暫時ためらつてもぢ／＼してゐたが遂に彼は積み重ねた本を支へに其の鏡を立て、コツソリ寫る自分の顔を窺はうとした。が然し角度に由つて春の光線が眩く彼の視覺に反射した。彼は其の鏡を取り上げて一寸位置を移して立てた。そして一寸體を捻らして其の鏡を正面に見た。横平い鼻がドカリと真中にあぐらをかいてゐた。便秘で黄ばんだ汚い皮膚に赤いそして先端の膿んだ面皰が點々と散在してゐた。夜更しや煙草でドンヨリ濁つた兩眼が毛蟲の様な眉の下に坐つてゐた。ふけの散らばつて少し赤味がかつた粗い髪の毛が不恰好な額の上に垂れ下がつてゐた。——彼は思はず「アー」と深い溜息をせずには居られなかつた。そして兩手で頭を支へデーツと考へ込むのであつた。今迄の期らさは何處にかふつ飛んで了つた。あの女が冷かに「フーン」と鼻の先で笑つてゐる様に彼は感じた。左手で自分の頬を撫でて見た。水氣で脹れ上つた肉塊にモチャ／＼と汚い髭が彼に不快な觸感を訴へた。彼は總ての人に見離された様な悲しさを感じた。潜んでゐた憂鬱が又ムラ／＼と頭を持上げて來た、あの女が彼に背を向けて向ふに行つて了つた。戀愛と言ふ者が彼と離れてズーツと向ふの高い山から蔑笑してゐた。そしてその代りにすぐ近くの部屋の隅にも人生の憂鬱と言ふ者が蹲つて居る様に彼は感じた。——

「然し……」と彼は暫時してから思ひ直ほして見た。「近代の女性は、戀愛に於て男の顔は第一義的のものではなく男の内容——つまり男性としての男を求めてゐるさうだ」と何時かの彼の友達の言葉を心の中で繰返して急に幾分の心強さを感じた。「そうだ、俳優にしたつて結城一郎等の優男は不人氣で、小杉勇やバンククロフトが持てるさうだからな」と彼はすぐに附け加へて思つた。「そうだ。歎くには及ばない。藝術家だつて例へばトルストイでもベートーヴェンでも皆甚い顔をしてゐるではないか」と「さうだ確かに希望を持て、眞の戀愛なんて單に容貌で決まる様なそんな皮相的なものぢやあるまい。相方しつかり交際して皮膚の向ふの精神と精神とが互に合致した時お互に感ずるのが戀ぢやなからうか」

が然し彼は靜に又考へて見る時、何處に行つたつて、カフェーに行つても散歩してゐる時でも女から白々しい視線しか貰へないで何時も空虚な隔離しか味はされない自分の姿を凝視める時彼は又深い／＼失望を感じるのだつた。そして彼は深い溜息をついては「何と言つても一番先きに見ゆるのは中味でなく外側の人間の顔である」と言ふ事を、いやでも肯定しなければならなかつた。「矢張りそうだ。戀愛なんて俺の考へた様に理窟ばいもんじやない。初めて會つた時に感ずる、あの仄かな愛情が戀愛と言ふもんだ。戀愛にやゝこしい理窟をはめるのは、神格論タスグロイに於てクリストを人の子と同一にする時既に宗教としての價値の大半を失ふのと同様なんだ。俺の先輩は俺に美しい女はどんなに美しからうとズーツと凝視めておれば二三日ですぐ厭いて了ふ。結局美しい女は美しい山水に外ならないのだ。それに反して内容のある女は、或時は皮膚を劈さく木枯の如く、或時は散り亂れる櫻花の如く、或時は巷間の秀婦の如く、或時は天上の聖母の如く、日々變轉極り無しと言つたが、それは結局有せざる者の負け惜しみなんだ。そうそうあの先輩も決して美しくはなかつたな、まあ俺自身を見て見い。俺はまだ一度も口をきいた事の無い、そして吉田絃二郎や野間清治系の齷す感傷や諧謔に泣いたり笑つたりする單純な少女に戀してゐるぢやないか。やつぱりあの女が美しいからなんだ。——そして俺は戀愛には落伍者なんだ！」と彼は猶もあの女を想ひ續けながらさう思つた。そして自分の知つてゐる友で彼女に戀してゐる男を一人一人と數へて行つた。「Aの奴は素直に俺に打明けたんだからな……、Bの奴は俺の様に素知らぬ振りをなしてゐるが彼奴の目誌を俺は讀んだし、Cの奴は彼奴の素振りで分るし……」と彼は遂に五人を數へた。無理もない彼女は美しいからだな——と思つた。そしてどうやら彼女がDの奴を愛して居るらしいと言ふ事に思ひ當つた時、彼は居堪まらない程の腹立しさを感じた。「女でどうしてあんな妙な英雄主義ヒロイズムの男が好きなのか」と思つて見た。そうしてあんな男に戀する位の女ならどんな美しい女だつて輕蔑してやらうと努めるものゝ、彼女の美しい、横顔横顔や綻び出る様な唇の蠱惑を思ひ浮べる時には矢張りあの女を憎み切れない自己をどうにも仕様がなかつた。そして彼は醜い自分と戀愛と、彼女とを比較して見る時に無限の悲しみと、寂しさがひた／＼と自分の胸に迫つて來るの感ずるのであつた。「それで俺なんて矢張り遠くから離れて彼女を想つては泣けばよいんだ。俺には、俺には孤獨が一番似合はしい様だ」と彼は自分で自分を宥めるのだつた。

「さうだく、潔く諦むるべし。顔なんて物理的フィジカルな物だからどうにも仕様がなない。俺には俺の世界があるぞ。笑へー笑へ、笑ふんだ！」と彼は押し上げて来る涙をチーツと堪へて無理に笑顔を作らうと試みた。そして一度思ひきつて、自分の醜惡を超越した氣で、何糞と前の鏡をきつと睨んだ。——すると其處には黝んだ厚い下唇の上に眞赤な齒莖と不揃の入り亂れた齒並が「ニーツ」と突き出し、口から發した深い皺が彼の頬を醜く歪めてゐた。——彼はア、とも一度深い溜息をついた。そして目を閉ぢた。驗の内側が次第に熱く潤んだ。彼は深い絶望を味つた。そして泣き出したい様な彼の心にあの優しい微笑が浮んで來た。彼は目に涙を一抔浮べた。そして「俺は決して笑ふまい、あの女の前では決して決して」と強く心に決めた。堪へ切れなくなつた涙が小鼻の下をチヨロリト冷く流れ落ちた。——すると何處からとなく町の屋根を越へて一種の哀愁を帯びた豆腐屋の喇叭の旋律が悲しく悲しく彼の耳許に響いて來た。